# 『浄瑠璃御前物語』十六段本考

紀　実　歩

## 一　先行研究・問題提起

『浄瑠璃御前物語』は、室町時代中期以降に成立した御伽草子である。語り物の特色として、諸本が数十本存在するが、十二段が流布本であることから、通常『十二段草子』と呼ばれる。他にも、十六段、十五段、八段系があり、書名も『浄瑠璃姫物語』、『浄瑠璃十二段』など様々である。

十六段本の山崎美成旧蔵『じやうるり御せん物語』（以下、山崎本と示す）は、第一部「申し子」譚、第二部「矢矧」の物語、第三部「吹上」の物語、第四部「五輪砕」の四部から成る。十六段本のMOA美術館蔵『上瑠璃』（以下、熱海本と示す）は、第一部「申し子」譚を欠くが、第二部から第四部までが備わり、山崎本の骨格に近い。

代表的な『浄瑠璃御前物語』の先行研究には、物語省略説と増補説の二つの立場がある。省略説をとる研究者に、森武之助氏と信多純一氏がある。森武之助氏は、『浄瑠璃御前物語研究―資料と研究―』（井上書房、一九六二年）において、省略説の立場をとり、次のように述べる。

今は、本地を語らんとする態度とは、ごく古態を示すものであるということで、その証として、室町時代物語が近世に流入して来て、改造される機会を得た時は、必ずといってよく、それらの語句は捨て去られる実例を挙げ得るということだけを、申添えて置きたい。他に一つ、「申子」の条に関して付言することは、浄瑠璃物語には、本来は、それが無かったろうとの説である。

森氏は、本地を語る「申子」の条こそ古態を示し、それらの「語句」は「捨て去られる」とした。

信多純一氏は、『浄瑠璃御前物語の研究』（岩波書店、二〇〇九年）において、次のように述べる。

一番に特筆すべきは、現存する『浄瑠璃』の本文は、いずれも同系統に属するものであることが確認出来たことであろう。いかなる本においても、増補と思われる箇所は見出せず、その本文異同の拠って起る因は、ひとえに省略か、それの惹きいだす破綻をつくろうための補筆等の所為であるか、あるいは錯簡に由来するもののいずれかであった。（省略）その場合山崎写本こそ残存諸本間にあって、原『浄瑠璃』にもっとも近い構成を

持つものであり、この書は全般にわたって要約することで分量的に少なくしようとした、所謂ダイジェスト版であることを確認した。したがって決して増補・書継ぎといった所為をなす筈はない。

信多氏は、山崎本が全体にわたって要約された「ダイジェスト版」であるにも関わらず、十六段の構成を持つことを根拠とし、十六段が原型であると想定する。

一方で、増補説をとる代表的な研究者に、室木弥太郎氏と角田一郎氏がある。室木弥太郎氏は、『増訂 語り物（舞・説経・古浄瑠璃）の研究』（風間書房、一九八一年）において、次のように述べる。

「五輪砕」は、「吹上」に比べて、伝説との関係ははるかに密接である。これは「吹上」とは逆に、物語成立以降に出来た伝説が多いのではないかと推測される。（省略）物語（上瑠璃）の終わりには、姫を死に至らしめた矢作の長を、簾巻にして殺している。（省略）この刑罰は説経の「さんせう太夫」等に見られるものと同工異曲で、明らかに中世的である。従って近世に入ってからの創作ではなく、やはり中世に成立したものであろう。しかし構成は「浄瑠璃物語」の主部のような編集式とは明らかに異なっている。そして「吹上」とともに、その続篇ないし後日物語である。だから成立も主部より後であると考えるのが妥当であろう。

室木氏は、「五輪砕」が「物語成立以降に出来た伝説」と関係して、あとから増補されたと考えている。

同じく省略説を唱える角田一郎氏は、『岩波講座 日本文学史』第七巻（岩波書店、一九五八年）「古浄瑠璃」において、次のように述べている。

あまい一夜が明けるとあわただしく別れて御曹司はふたたび吉次の供をして旅立たねばならなかった。哀愁の基調を以て、この諸本共通の部分は終る。しかるに、慶長子活字本とその系統の諸本には後日物語が続く。（省略）結末の明るさに反比例して吹上の浜辺の死から救出までには悲劇性が強く描かれている。この後日物語の増補の時期はよく分からないが、本曲のあとに続く初期の古浄瑠璃はこの吹上の物語のように遭難の悲劇性と結末の幸福とのきわだった主題を取ることが多い。そして恋物語は見棄てられる。『十二段草紙』の主部というべき矢矧の物語は、室町の文学趣味と桃山文化のはなやかさが余映を保っている間は、全面的な支持を得たであろうが、やがて次期に継承せられるものと棄てられるものとに分れて行くのである。

角田氏は、「吹上」の「悲劇性」と「結末の幸福」との「きわだった主題」を「後日物語」の特色とすると論じている。

省略説と増補説のいずれを是とするか、いまだ決着はついていないが、新日本古典文学大系『古浄瑠璃 説経集』（一九九二年）の底本に熱海本が採用されるなど、現在は省略説が主流と言える。先行研究では成立論における論考が中心となっており、十六段本の作品そのものに関する評価はほとんどなされて来なかった。そこで本稿では、成立論からは一旦離れた立場で、十六段本を対象とし、その物語としての特質を探りたい。山崎本と熱海本本文の比較を通して、その違いを明らかにし、その検討を通して、十六段本諸本の主題に迫りたい。

## 二　十六段本における人物像

人物像の比較にあたって、「吹上」の二場面を取り挙げる。次に挙げるのは、御曹子が浄瑠璃と別れ、奥州に向けて下っている場面である。浄瑠璃との別れの悲しさから、上の空のまま旅を続ける御曹子の姿が描かれる。以下、本文の引用に際しては、山崎本は新潮日本古典集成『御伽草子集』により、熱海本は新日本古典文学大系『古浄瑠璃　説経集』によりつつ、読解の便宜をはかり、適宜濁点を施して引用する。

| 山崎本　十一段　ふきあげ | 熱海本　上瑠璃巻第七 |
|---|---|
| 御ざうしは、きちじのたちを、もたせたまひて、くだらせたまふを、ものに、よく〳〵たとふれば、ゆきおれたけにて、なけれども、よわ、さかさまになりにけり、いしは、ながれて、このは、しづみ、さかさまがわ、世は、はやかうよと、なりにけり、いとゞものうき、ゆふぐれに、こくさのしゆくにぞ、おつきある、①じやうるり御ぜんのおもかげの、みをはなれずして、ゆくにゆかれぬ、こはいかに、つゆのいのちは、きゆると | 扨もそのゝち、御ざうしは、吉次が、たちをもち、四十二疋の、むまをひくはじやの、ぶぎやうとさだまり、あづまをさして、くだらせ給ふが、御ざうしのおぼしめすは、吉次がたちをもつ事は、ひとへにむねんの次第と、おぼしめせども、ちうにて心を、ひきかへし、まてしばし、わがこゝろ、是とても、吉次がたちにて、あらばこそ、②めいどにまします、ちゝよしともの御たちと、おもひをなし、くだらばやなと、おぼしめし、国 |

| 山崎本 | 熱海本　上瑠璃巻八 |
|---|---|
| 該当箇所なし | 御ざうしは、きこしめし、二百四十四人か、その中より、わらは一人、めしいだしつる事は、ひとへに、むねんとぞんづれど、又是とても、吉次がつかひで、あらばこそ、④一とせ、おはりのくにのまのうつみ、たるみの、ゆどのにて、御はらめしたる、よしともの御ため、身のためなれば、いそがばやなと、おぼしめし、 |

も、たちもどり、じやうるりごせんのすがたを、みんとは、おもはれけれども、きちじに、すがたはなれかね、よをかさね、日をかさね、くだらせたまひけるほどに、

のやはたを、ふしおがみ、三河かぎりの、さかい川、なみだとともに、うちわたり、いそがせ給ふと申せども、③あかぬわかれの中なれば、すそはつゆ、袖はなみだに、うちしほれ、

山崎本傍線部①、および熱海本傍線部③は、浄瑠璃との別れを悲しむ御曹子の様子である。両本とも、吉次の太刀を持ち、東へ下る御曹子の姿が描かれている。同じ場面を同じように語っているように見えるが、熱海本傍線部②においては、「めいどにまします、ちゝよしともの御たちと、おもひをなし」と、父義朝の存在を意識する御曹子の心情が描かれることに注意しておきたい。

次に挙げるのは、東へ下る道中の御曹子の心中が描かれる場面である。山崎本にはなく、熱海本に固有の本文である。

熱海本傍線部④には、父義朝を意識する御曹司の描写が続く。熱海本にみられる父義朝をめぐる本文は、山崎本にはほとんど認められない。山崎本では、浄瑠璃との別れを嘆き、浄瑠璃に想いをはせる御曹司の描写が多くなる。山崎本では、浄瑠璃との別れの余韻が残る結果となる。それに対して、熱海本では、浄瑠璃との別れを境に、御曹子の父義朝意識の表現が多くなる。この場面以降にも、「かたき、へいけに身をかくし、かねうり吉次を、たのみつゝ、おくへ、くだりし事なれば」「さとうひでひらを、たのみつゝ、十万よきを、もよほして、をしてみやこへ、せめのぼり、をごるへいけを、たいらげて、げんじの御代とさだめんためなり」などの表現があり、旅の目的が、平家討伐にあることを語る御曹司の言葉が頻出する。御曹司の父義朝の死は、平家によってもたらされ、御曹子は平家を仇とし、平家討伐に向けて旅を続けているという。御曹司の旅の目的は、平家討伐と源氏再興なのである。熱海本は、物語の主軸が、父義朝の無念を晴らすことにあると言える。

次に取り挙げるのは、浄瑠璃と別れた悲しみから、御曹子が恋の病にかかる場面である。御曹子は病のために旅を続けられず、吉次と別れることになる。

| 病を患ったときの二人のやりとり | |
|---|---|
| 山崎本　十一段　ふきあげ | 熱海本　上瑠璃巻第八 |
| 御ざうしは、めしたるあはせを、おしはづし、いかにや、きちじどの、ろじくたびれにて、をはすらん、または、いつものかぜやらん、やはんばかりに、にわかに、やまふをして候ぞ、どなたへもあづけおき、くだらせたまへと、おほせけり、きちじ、このよしうけたまはり、あつきこゝろを、ひきかへて、さては、やまふをおこしたぞよ、こゝろやすく、おもはれよ、やどのきくやを、ちかづけて、このくわじやのやまふを、かいびやうめされてたまはれとて、すぐりて、かねを五十りやう、よきむまそへてぞ、あづけける | 吉次此よしみるよりも、大事のあきなひせしものか、あのくはじや一人あるゆへに、けふ七日は、まちけれども、いくひさしくは、かなはねばとて、やどのきくやを、めしいだし、しやきん百両、まきゞぬ百ぴき、えさせつゝ、いかにや申さん、きくやどの、あのくはじやと申は、そもそれがしが、ひざうの、くはじやにて候しが、みやこは一てうかどの、よねやが子にて候ひしが、ちゝ母のふけうを、かうむり、それがしをたのみつゝ、はるかの、あづまへ下りしが、おさなきものゝ、今をはじめの、たびなれば、かやうになやみ候ぞや、よきにかんびやう、したてつゝ、是よりあづまへ、をくりとゞけてたびたまへ、（中略）きくやどの、とぞ申されける |

| その後の二人のやりとり | |
|---|---|
| いかに、くわじやどの、それがしも、とうりうして、かいびやうせんとは、おもへども、なか〳〵の、たびのそら、こきやうも、ゆかしうありければ、それがし、あづまへくだるなり、とぞ申ける、⑤御ざうしは、いかに、きちじどの、みやこをいでし、このかたは、御身をおやと、たのみつゝ、はる〴〵これまで、くだりけれども、いまはそのかい、さらになしとて、かきくどきてぞ、おほせける、きちじも、これをみたてまつりて、ともにそでをぞ、ぬらしける | 御ざうしはきこしめし、いかにや申さん、きちじどの、みやこを出し、そのときは、⑥御身をば、おやとも、しうとも、きやうだいとも、天とも地とも、たのみつゝ、はるかのあづまへ、くだる身が、せけんにはやる、風をえたとて、すてをきたまふか、なさけなしとて、なみだに、むせび給ひける、吉次、此由きくよりも、御身の御存じのごとく、大事のあきなひ申身が、けふ七日は、まちけれど、いく久しくは、かなはねば、やどのきくやを、くはしくたのみて候ぞや、よきにかんびやうしたてつゝ、これよりあづまへ、くだらせたまへや、いとま申て、さらばとて、 |

山崎本の御曹子は自身の病気を悟り、自ら吉次に自分を置いて旅を続けるように言う。吉次も看病を続けたいという心中を語るが、看病を宿の亭主に任せることにし、両者涙ながらに別れた。傍線部⑤において、御曹子は吉次のことを親のように慕いながら、旅を共にしてきたと打ち明ける。吉次を親のように慕う御曹子、御曹子との別れに涙する吉次。両者の関係は、お互いを慕い想い合う、本物の親子のような親愛の情で結ばれていると言えるのではないか。

これに対して、熱海本では病回復の兆しがみえない御曹子を待ちかねた吉次が、御曹子を見捨てる。涙ながらに別れを拒む御曹子に対し、吉次は淡々と別れを告げ、宿をあとにした。傍線部⑥において、御曹子は、「天とも地ともたのみつつ」という、やや大げさな表現で吉次の気を引こうとする。ここに見える両者の関係は、自分本位な、功利的関係で結ばれていると言えるのではないか。

以上、人物像の比較を通して、同じ十六段本であっても、人物造形は大きく異なり、諸本の性格に違いがあることが明確になった。それは、利他的に行動する人物を描く山崎本と、利己的に行動する人物を描く熱海本という結果でまとめられる。山崎本の御曹子は情に厚く、熱海本の御曹子は我の強い人物として描かれていた。また、熱海本は、物語の主軸が義朝の無念を晴らすことにあることもわかった。これに対し、山崎本では、御曹子と浄瑠璃との恋仲が物語の基調をなしている。

## 三　十六段本の主題―源氏御曹子としての熱海本

本節では、「五輪砕」の二場面を取り挙げる。「五輪砕」は、浄瑠璃の祈願により、病が回復した御曹司が、浄瑠璃との再会を約束し、奥州に向かう場面から始まる。三年後、浄瑠璃の住む三河の国に戻ってきた御曹司は、浄瑠璃が死んでしまったことを知る。浄瑠璃のもとへ向かった御曹司が、亡き浄瑠璃に向けて歌を詠むと、返歌が返ってくる。そのやり取りを最後に、浄瑠璃の霊魂は消えてし

まう。御曹司は浄瑠璃の死を悼み、仇討ちを行った後、平家討伐にも成功し、源氏再興の時代をおさめた。

本文は前後するが、行論の都合上、御曹子仇討ちの場面を先に検討していきたい。山崎本の本文は以下の通りである。

にようばうたちの、そのなかに、もんじゆのまいが、申けるは、あづまにて、うしわかどのは、ひでひらが、ひとりむすめに、ちぎりをこめ、げんじを、さかへさせ給ふと、きこへけり、じやうるりこのよしきこしめし、なみだにむせびて（中略）身づから、このやまへ、はなされけるも、うしわかどのに、一夜のたわふ申たるゆへなりけり、そのうへ、ふきあげはまにて、やまふをおこして、まします を、身づから、はるゞくだりて、かいびやう申て、まします なり、さては、うしわかどの、ひでひら、さとうが、むこになり、御世をあんどゝ、きこへける、みづからに、二世のちぎりとありけるが、たゞ一ときの、はなごゝろ、ゆめとなるこそ物うけれ、なみだにむせびて、やどられける

もんじゆのまいは、へいけがたの、ものなれば、いざ、みづから、ざんそう申さばやとおもひ、まくらもとに、たちより、いかにわが君、きこしめせ、君のためには、これすぎたる、ちじよくは、さぶらはず、いかやうにも御身の御はからいあれ、と申ける、じやうるり、このよしきこしめし、みづからも、このていにも、みをはからわんとは、おもひけれど、にようばうたちを、めしよせて、いかに申さん、にようばうたち、身づからは、なさけなき、ちじよくをもちて候へば、いのちを、きやさんとおもふなり、（中略）なさけなき、ちじよくをかき、はんじ、いきても、なにかせんとて、にしへむかつて、ねんぶつし、ついに、じがひをめされけり、にようばうたちは、はかなくならせたまふ御しがひに、いだきつき、なげくやうこそ、あわれなり

山崎本では、侍女文殊の前が登場する。文殊の前は、浄瑠璃に御曹子の現在について偽りの話をする。その話を信じた浄瑠璃は、悲しみ、御曹子に裏切られたことによる衝撃から、自ら命を絶ってしまう。浄瑠璃は、「へいけがたのもの」である文殊の前の讒奏によって死ぬのである。浄瑠璃は、思いがけず、源氏と平家の敵対関係の渦中に巻き込まれて、死を遂げてしまう。

文殊の前によって死を遂げた浄瑠璃の仇を討つため、御曹子は文殊の前を処罰する。物語末尾には「御ざうしは、おもふとも、かひもなし、いまはたゞ、げんじの御世を、うちおさめ」とあり、平家討伐成功をもって物語は終りを迎える。

また、山崎本には、母長者の自害についても描かれている。熱海本にはない場面である。

はゝのちやうじやは、じやうるりごぜむの、はかなく、ならせ給ひたるよしを、きこしめして、（中略）いきて、この世にあるとても、こいしきひめに、あふ事もなしと、おもわれて（中略）にしにむかって、ねんぶつし、そこのみくづと、なられける

母長者は、浄瑠璃が御曹子と一夜を過ごしたことを咎め、浄瑠璃を家から追い出していた。そして、長者は浄瑠璃を失った悲しみにより自害する。長者には、少なからず、浄瑠璃を追い出したことに対する罪の意識があったと言えるだろう。

次は、熱海本の本文である。

一とせ御身さま、おくへくだらせたまひし時、ふきあげはまにて、なやませ給ひし、その時に、上るり御ぜんの、たづねさせ給ひしを、は、のちやうじやのきこしめし、十二人の女ばうたちを、めしかへ〳〵、かずのつかひのたちけるは、いかなる大みやうをも、むこにとらんと思ひしに、思ひのほかにひきかへて、かねうり吉次が、ともをする、むまをひくはじやに、一夜のちぎりを、こむるさへ、よにくちおしく思ひしに、ましてあとをしたふ事、むねん、たぐひはなかりけり、此御しよにかなふまじ、いづくへなりとも、まぎれゆけとて、かずのつかひのたちければ、あはれなるかな、上るり御ぜんは、心にか、ると、おぼしめし、みづからをうちつれ、やはぎのしゆくをば、なみだとともに、いでさせ給ひて、こ、に又、ほうらいじのおくに、さ、だにと申て、ふかきたにのさぶらひしが、此たに、て、（中略）すまはせ給ふが、じきせんもの、、あらざれば、みづから、あまりのかなしさに、さはのへいで、、めぜりをつみ、さと田へおりて、おちぼを、ひろひてたてまつれば、露のいのちを、をくらせ給ひて、三とせまでは、またせ給ふが、つゐに御身をまちかねて、一しゆは、かうぞあそばしける

あづまより、ふきくる風の、物いはゞ　とはん物かは、君のことのはを

と、これをさいごの、ことばにて、あしたの露と、きえさせ給ふが、

熱海本において、浄瑠璃は、肉親である母長者に追い出され、生活が乏しくなり死を遂げてしまう。御曹子は浄瑠璃の仇をとるため、長者を処罰する。そして、熱海本もまた、「御ざうしは、五万よきを、もよほして、花のみやこへ、のぼらせ給ひて、をごるへいけをたいらげて、げんじの御代となさせ給ふ」と、御曹子の平家討伐で物語が終わる。仇討ちの相手や、浄瑠璃の死の原因は相違するものの、両本とも最終的には源氏御曹子の平家討伐によって幕を閉じる。

熱海本は、平家討伐によって、父義朝の無念を晴らすことが物語の主軸であった。熱海本は、主人公御曹子を軸に物語が進む。その中で御曹子は、父の無念を晴らすため、平家討伐への思いが一度も揺らぐことがなく、最終的には、源氏再興の時代を成し遂げる。熱海本の御曹子は、武士としての道理に忠実であったと言えよう。その我儘さや我の強さは全て、この「道理」に忠実であったが故とも捉えられるのではないだろうか。平家討伐のためならば手段を選ばない忠義さが、御曹子像に表れていたのだろう。熱海本は、道理に忠実であった御曹子の大成が、物語の主題であると言える。

## 四　十六段本の主題―恋愛譚としての山崎本

本節では、「五輪砕」において交わされる御曹子と浄瑠璃の和歌をみていく。次の引用は、浄瑠璃の死後、御曹司が、死んだ浄瑠璃と和歌のやり取りを交わす山崎本の場面である。

御ざうしは、なみだに、むせばせたまひて、すみかなりとも、みんとおぼしめして、さ、だにをさしてぞ、のぼられけり、びやうしよのあたりを、みたまへば、物のあはれは、かずしらず、なきひとに、一しゆのうたを、かけられける

⑦われゆへに、よしなきつみの、あわとなり　きへうするこそ、
あはれなりけり
と、あそばせば、びやうしよの、うちよりも、へんかにかくこそ、あそばしける
⑧かりそめに、ちぎりしひとは、けふはきて　こけのしたまで、
とふぞうれしき
と、あそばして、かきけすやうにぞ、うせにける

山崎本では、交わされた和歌は二首のみである。御曹子の和歌⑦「われゆへに、よしなきつみの、あわとなり」にある言葉の通り、御曹子は「私のせいで浄瑠璃がはかなくなってしまった」という気持ちを歌う。御曹子の言う「われゆへに」とは、どのような意味であろうか。

ここで、「矢矧」における御曹司の言葉に注目したい。次の引用は、恋仲になった御曹子と浄瑠璃が別れる最初の場面である。別れ際、御曹子は浄瑠璃と次のような約束を交わしていた。

じやうるりごぜんの、たもとにすがり、あづまへくだり、ひでひらをたのみ、けいさくし、みやこへのぼるほどならば、御身をつまとさだめ、二世のちぎりを、むすぶべし、またせたまへや、やはぎの君とて、ゆくにゆかれぬ、たびのみち、あづまをさしてぞ、くだられける

御曹子は、別れ際に、次に会うときは浄瑠璃を妻とし、夫婦関係を約束すると言っている。病から回復し、浄瑠璃に二度目の別れを告げる際も、御曹子は全く同じ約束を交わす。この約束を果たせなかったことに、疚しさを覚えた御曹司の気持ちが、⑦「われゆへに」の和歌に込められているのではないだろうか。これに対し、浄瑠璃は、和歌⑧において「ちぎりしひと」御曹子に、「こけのしたまで、とふぞうれしき」と感謝の念を歌い、その和歌を最後に消えてしまう。

次に、熱海本の本文を取りあげる。

御はかどころになりしかば、みはかを一目御らんじて、なみだ、ながせたまひつゝ、（中略）
その〻ちに上るり御ぜんの、ゑかうのためとて、一しゆはかうぞ、あそばしける
いにしへの、⑨こひしき人の、はかにきて　みるよりはやく、ぬる〻そでかな
と、あそばし給へば、御はかどころと、おぼしくて、やがて、へんかに、かくばかり
ぬる〻とも、そなたのそでは、あればみる　たゞ⑩くちはつる、身こそつらけれ
と、あそばしたまへば、御ざうしはきこしめし、やがて、へんかにかくばかり
こがらしの、身にしむほどは、おもへども　⑪恋しき人は、などながるらん
と、あそばしたまへば、みはかどころの御へんかに
一たびは、ちらでかなはぬ、花なれど　さかりにちるぞ、⑫もの
のうかりける
と、あそばしたまへば、御ざうしの御へんかに
ふる雪の、そらにこゝろの、あくがれて　きえてかへらぬ、人ぞ⑬こひしや
と、あそばしたまへば、みはか所の御へんかに

あはれとよ、たつたの山の、うすもみぢ　ちりにしあとを、と
ふぞやさしき
と、あそばしたまへば、御ざうしの御へんかに
しち〳〵の、日かずがけふに、つもりきて　七つ〳〵の人ぞ
⑭こひしや
と、あそばしたまへば、みはかどころの御へんかに
かりそめに、⑮みちゆき人に、なれそめて　こけのしたまで、
とふぞうれしき
と、あそばし給ひて

熱海本では、四首もの贈答歌が二人の間で交わされる。⑨⑪⑬⑭に示したように、熱海本の御曹子の和歌には、「こひし」が多用されており、浄瑠璃への恋しさが一貫して詠まれていると言える。それに対して、浄瑠璃の和歌には、傍線部⑩「くちはつる身こそつらけれ」、⑫「ものうかりける」のように、自身の境遇を嘆く言葉が多用される。一貫して「こひし」を歌う御曹子に対し、浄瑠璃は、御曹子のことを⑮「みちゆき人」と表現し、あたかも偶然通りかかった他人のような、一歩引いた表現をとる。

次の引用は、三年ぶりに浄瑠璃の住んでいた三河の国に帰ってきた御曹子が、浄瑠璃の不在に気づいた場面である。御曹子は次のような言葉を残す。

こゝろにかゝる上るり、ざしきにあらざれば、くはけむも、さらに身にそまず、れんちうふかく、しのばせたまひて、ではのさかたを、ちかづけて、いかにさかた、うけたまはれ、一とせ、それがし、おくへだりし、そのときに、此やかたの、ちやうじやがむすめに、一夜のちぎりを、こめたりしが、そのおりふし、ふかくけいやく申つるは、らいねんの春の比、たよりの文をまいらすべし、なつは、かならず、わざと人をも、のぼすべし、それもすぎゆくものならば、あきは、かならずのぼりつゝ、うたものがたりを申べしとて、ふかくけいやく申つれども、それがし、にはかに、おにがしまへわたりつゝ、文をものぼせず、のぼりもせねば、これをうらみて、いでぬかや

御曹司は、浄瑠璃に、春には手紙を送り、秋には必ず浄瑠璃のもとで歌物語を語りましょうと、別れ際に深く約束を交わしていた。御曹子は、浄瑠璃がいないのは、その約束を守らなかった自分を恨んだからだろうか、と思っている。御曹子はここで、約束を守れなかったという事実を自覚していることが分かる。山崎本とは異なり、熱海本では約束違反を自覚しながらも、浄瑠璃に対する御曹子の疚しさは描かれない。この結果が、浄瑠璃の和歌⑮「みちゆき人」に体現され、浄瑠璃の御曹子に対する心離れが際立つ結果とつながっているのだろう。

山崎本と熱海本の二本には対照性があることが改めてうかがわれよう。自身の責任を自覚する御曹子と長者像によって、山崎本には、他人への情けや自省をもった行動が描かれていると言える。人としての情け、他人への思いやりといった観点から、山崎本の人物は、人情深い人物と捉えることができる。これに対して、自身の非を自覚しながらもそれと向き合わない御曹子、娘の死を悼まない長者などの人物像より、熱海本の人物は、自身の行動を省みない、山崎本とは正反対な性格である。山崎本とは対照的に、熱海本の人物は非人情な人物だと言えるだろう。

両本の和歌の比較より、山崎本が御曹子と浄瑠璃の恋模様を物語

の主軸とすることを改めて確認することができる。浄瑠璃への心残りを拭えない御曹子に対して、「契りし人」と御曹子を慰める浄瑠璃は、御曹子に対する感謝の気持ちを和歌にした。山崎本は人情を映した人物造形が特徴であり、物語の場面それぞれに、登場人物の情が働いている。それぞれの場面で描かれる人物の情が、物語の方向を左右していたように感じられる。人間が本来に持つ情や、他人への情けが物語の主題と言えるのではないだろうか。よって、山崎本は、人間の情を描いた、御曹子と浄瑠璃の恋物語が主題であると結論づけたい。

## 五　結論

本稿では、『浄瑠璃御前物語』の十六段本に焦点を当て、山崎本と熱海本を比較した。先行研究では成立論が中心的問題であったが、十六段本の物語性を評価する立場で諸本を比較考察すると、同じ十六段本であっても、その性格に大きな違いがあることが明確になった。本稿では、人物像においては、「人情」と「非人情」の対比、主題においては、「情」と「理」の対比で、山崎本と熱海本の性格の違いを導き出した。

同じ枠組みの中でこれほど主題が相違するのであれば、語りの過程で話が付け加えられていったとする増補説の方が有力だと考える。登場人物の人情を特徴とし、情を主題とする山崎本は、従来の型、いわば十二段本の流れに沿った物語である。一方、登場人物の非人情を映し出し、理を主題とする熱海本は、物語に意外性をもたらしている。熱海本の本文には、前半「矢矧物語」の御曹司像と、後半「吹上」以降の御曹司像とで齟齬があるということである。十二段本の流れを汲んだ山崎本に対し、新たな脚色を取り入れた熱海本という対比を、ここに読み取ることができるのではないだろうか。

### 主要参考文献


・松本隆信校注 新潮日本古典集成『御伽草子集』「浄瑠璃十二段草紙」（新潮社、一九八〇年）
・信多純一校注 新日本古典文学大系『古浄瑠璃 説経集』「浄瑠璃御前物語」（岩波書店、一九九九年）
・角田一郎『岩波講座 日本文学史』巻七（岩波書店、一九五八年）「古浄瑠璃」
・森武之助『浄瑠璃御前物語研究―資料と研究―』（井上書房、一九六二年）
・室木弥太郎『増訂 語り物（舞・説経・古浄瑠璃）の研究』（風間書房、一九八一年）
・信多純一『浄瑠璃御前物語の研究』（岩波書店、二〇〇九年）
・深谷大『絵巻群と古浄瑠璃』（ぺりかん社、二〇一一年）



[付記]

本稿は、令和四年度山口大学人文学部国語国文学会研究懇話会（令和五年二月四日）における口頭発表をもとに執筆いたしました。発表時にご質問くださいました野坂昭雄先生、安本真弓先生に心より感謝申し上げます。



（きい・みほ）